

## コロナ下の登山「そんな時代もあったよね」の実相記録3 マスク

OWCC 中川和道 20200913

コロナ騒ぎのなかで、大阪府の吉村知事がマスクをはずしてマイク取材を受ける姿に、おや？と思った。聞けば、聴覚障がいの方々への対応だという。マイクに向かうのだからマスクはいらない。なるほどと納得した。

マスクには笑いのこもった思い出がある。訳も分からず山に引き込まれ始めた1970年学生の頃、心肺トレーニングだとマスク姿でグラウンドを走り回った。粋がり過ぎて苦しくなって鼻を出し、それでも苦しくペースを落とした。ビールのあとグラウンドに駆け出して悪乗り走りした。カゼを引いた時はビールでカゼ薬をオーバードーズにあおり、マスク姿で鈴鹿の山に挑戦した。当たり前だが見事に敗れて逃げ帰ったりもした。近年2015年に「羽生結弦マスク」[a]を知った。ウイルス対策の0.1ミクロンメッシュを開発したところ、PM2.5騒ぎを機に徐々に売れ始めていたらしい。葛西紀明氏も名城大学女子駅伝部も使ったといい、何と、1枚17980円。値段も迫力だ。

今回の新型コロナ騒ぎ：緊急事態宣言全面解除を受けて山岳四団体が5/25に出した「ガイドライン」[b]の第5項「登山中でもマスク着用を」の影響は大きく、今も続いている。大阪労山からはS村さんが「登山中にそんな「密」が発生すること自体がおかしい。やめられないか。」と全国理事会で発言され、話題になった。四団体の話し合いでは「場面はいろいろ。いつ着けるか外すかを短くまとめるのは難しい」との展開であの結論に至ったらしい。その後は「各団体の実情にあわせて独自に判断していく」ことになった。これを受けて7/4-5の労山全国連盟遭難対策担当者Web会議において「「マスクをいつ、どう、はずすか」を考えていこう」との方針が確認され、労山では大きな方針転換となった。うれしかった。ガイド協会も早々に自己判断路線に動いた。

一方、5/25山岳四団体「ガイドライン」は9月現在も固く生きている。NHK神戸放送局「Live-Love-兵庫」月曜日の「兵庫山歩道」[d]を4月以来たどってみよう。宣言前の4月上旬にはマスクなしで楽しく登っておられたが、そこからあとはマスクだ。6月15日放送では兵庫県山岳連盟副会長黒田信男さんががっちりしたマスク姿で坂元アナはバフ姿で登場する。画面には四団体ガイドラインがでかかでか表示された。このころ日本の登山界は公式にはマスク一色だ。百丈岩で会ったクライマーたちは「公式にはああだが、このくそ暑いのに、何がマスクじゃ！」。9/7放送になるとマウスシールドに変わるが、字幕には「マスクを着用し登山者どうし距離を取りましょう」。

山岳救助隊も深刻だ。山形新聞8/10[e]にはコロナ感染疑いのある遭難者への救助訓練の写真がある。白い全身防護服、ゴーグル、ゴム手袋の救助隊員が経塚山で遭難者役の人の額に非接触体温計を近接させ体温を測っている。山岳四団体ガイドラインに従う記述もある。こりゃ大きな負担だ。

救助隊がコロナ疑いの救助を実際にやったのは、6/18白馬大雪渓での滑落遭難者から救助要請を受けて出動した時だという[f]。県警が体調を聞き取ったが、感染していないかどうか見極めが難しいので、遭難者に防護服を着せ救助隊員はカップ、マスク、ゴム手袋を使用し背負い搬送したという。救助隊のご苦労が思いやられる。自分の体調把握は自分の責任だとつくづく感じさせられた。

お堅い団体の都合もあろうが、私たちは私たちが独自に試行錯誤を続けていこうではないか。

[a] 2015/03/27 東洋経済オンライン、2018/02/07 朝日デジタル

[b] 2019/05/25 山岳四団体「政府の緊急事態宣言全面解除を受けて 山岳スポーツ愛好者の皆様へ」

[c] 20200704-5 全国遭難対策担当者 Web 会議

[e] 山形新聞 Yamagata News Online 2020/08/10

[d] <http://www.nhk.or.jp/osaka-blog/live-love-hyogo/435468.html>

[f] 信毎 Web 2020年7月7日「新型コロナ疑いの遭難者救助 北ア 県警隊員」